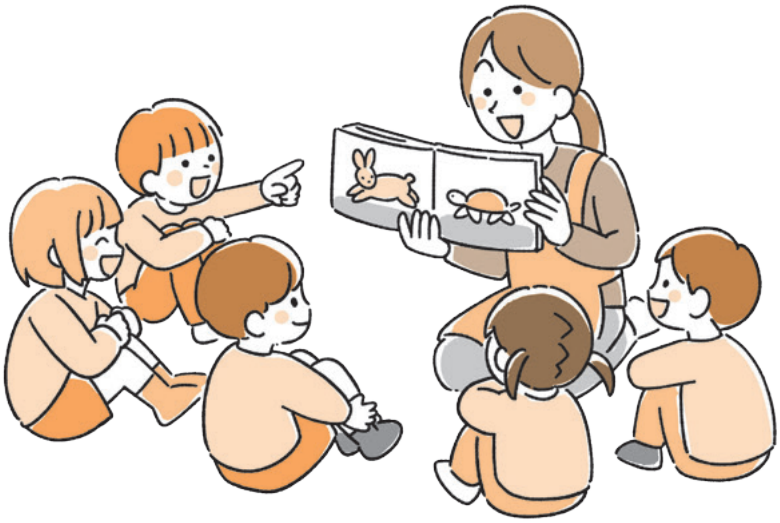


特集 1

絵本で深まる子どもの育ち

絵本そのものを始めとして、読み聞かせ、図書館利用といった絵本に触れる活動は、子どもの育ちを支え、豊かなものにします。その一方で、選書、環境構成などの具体的な取り組み方は、各園に委ねられている場合が多いのではないでしょうか。

本特集では識者の解説や事例などを通して、絵本が育む将来的な力をご紹介しながら、各園がどのように絵本を用いた活動を深めていけばよいかについて、考えていきます。

解説

絵本と読み聞かせの意義を学び、小・中学生までつながる基盤となる力を育む

絵本の読み聞かせは、子どもの想像の世界を豊かにしながら言葉の力を育てる大切な活動として、多くの園で実践されています。しかし、そうした活動の意義について、じっくり整理してみたことはあるでしょうか。絵本にはどのような価値があり、その読み聞かせがなぜ子どもにとって大切で、保育をより豊かにするためにどのように生かしていけばよいのか。発達心理学などを専門とし、絵本や読書に関する研究や発信に取り組んできた秋田喜代美先生に、お話をうかがいました。

学習院大学文学部 教授
東京大学 名誉教授
秋田喜代美先生（あきた・きよみ）

東京大学大学院教育学研究科教授、研究科長などを経て、2021年から現職。専門は学校教育学、発達心理学、教育心理学。こども家庭庁こども家庭審議会会長などを歴任。著書に、『絵本で子育て』（共著、岩崎書店）、『保育のみらい』『保育の心もち』（いずれも、ひかりのくに）など多数。

幼児期の読み聞かせが、子どもの育ちの基盤になる

絵本を読み聞かせるひとときが子どもの内面や言葉の力を育てる

園における絵本の読み聞かせは、子どもが本に触れる経験を保障しながら、認知・非認知両面での豊かな育ちを支える大切な時間です。園で読み聞かせを行えば、子どもたちはその世界に引き込まれ、みんなで驚いたり笑ったりする中でクラスに自然な一体感が生まれ、情緒的なつながりが強まっていきます。心が落ち着くひとときとなる読み聞かせを毎日繰り返すことで、「今日はどんなお話かな？」と楽しみに待つ気持ちも子どもに育っていきます。

絵本を通じて、言葉の世界が広がることも重要な点です。絵本には多様で豊かな表現が含まれており、文章もやや長めで整っています。印象的な言葉を声に出して楽しんだり、文脈から意味を推測したりすることで、子どもは語彙の幅を広げていきます。言葉への感受性も、そこから育まれます。

絵本を上手に活用すると、日々の保育をもっと豊かにすることができます。例えば外遊びの前にその遊びに関する絵本を読むことで、自然への興味・関心が高まり、遊びへの意欲も高まっていくでしょう。また、帰りの会でその日の活動とつながる絵本を読めば、理解を深める振り返りの場にもなります。

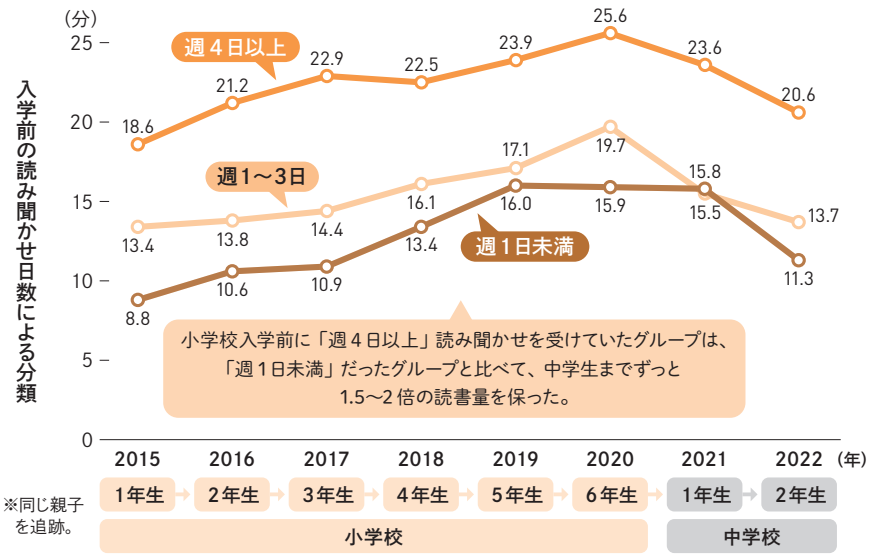
物語をきっかけとして、子どもたちの主体的な遊びが広がることもあります。例えば、『エルマーのぼうけん』（ルース・スタイルス・ガネット作、福音館書店）を読み、「こんな遊びをしよう」と、想像を膨らませる姿が見られるかもしれません。

絵本との出合いが長期的に重要となる資質・能力を育む

長期的な視点で見ても、絵本の読み聞かせは子どもの発達に大きな影響をもたらすことが、国内外の継続的な研究から明らかになっています。

家庭では、乳児期には読み聞かせの機会が比較的多くもたれていますが、幼児期には家庭による差が

図1 読書時間の個人変化（入学前の読み聞かせ日数別、小１→中２で同じ親子を追跡）【2015-2022年データ】



※「あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、１日にどれくらいの時間やっていますか」という設問の「本を読む」に対する回答から平均時間（分）を算出。「しない」を０分として算出。
※小学１～３年生は保護者、小学４年生～中学２年生は子どもの回答。小学１年生時点の保護者調査で、小学校入学前の読み聞かせの日数についてたずねた質問をもとに分類。「週４日以上」は「ほとんど毎日」「週に４～５日」、「週１～３日」は「週に２～３日」「週に１日」、「週１日未満」は「月に１～３日」「ほとんどしなかった」と回答した保護者の子ども。同じ集団の各学年での読書時間を算出。
※東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査」より。

＊１ 資料の詳細は、下記でご検索ください。

ベネッセ　子どもの読書行動の実態

大きくなるという実態があります。こうした違いは、小学生以降の読書習慣に大きく影響するという調査結果が報告されています。

小・中学生時期に同一の親子を継続して調査した結果を読書行動に着目してまとめた資料「子どもの読書行動の実態」＊1によると、小学校入学前にほとんど家庭で読み聞かせを受けなかった子どもは、学年が上がっても読書時間は短いままで、不読につながりやすい傾向があります。一方で、家庭で週４日以上の読み聞かせを受けていた子どもは、学年が上がっても一定の読書時間を保っています（図1）。

幼児期から中学生まで同じ母親を継続して調査した「幼児期から中学３年生の家庭教育調査」＊2には、幼児期の読み聞かせが小学生での「ひとり読み」や「読書体験共有」につながり、中学生での語彙力を支えていることが示されています（P.4 図2）。つまり、幼児期の読み聞かせを通じて１人で読書ができるようになることで、語彙力や論理性、思考力といった、将来にわたって求められる資質・能力の基盤となる重要な力が育まれるのです。

「読む」だけで終わらせず、絵本の力を保育に「生かす」

絵本を通した豊かな会話で子どもの表現力を育む

読み聞かせは、10～15分程度でも習慣化できれば十分に効果があります。家庭での読み聞かせでは、忙しい中でも「短くても続ける」ことを意識するよう、保護者に伝えていただきたいと思います。

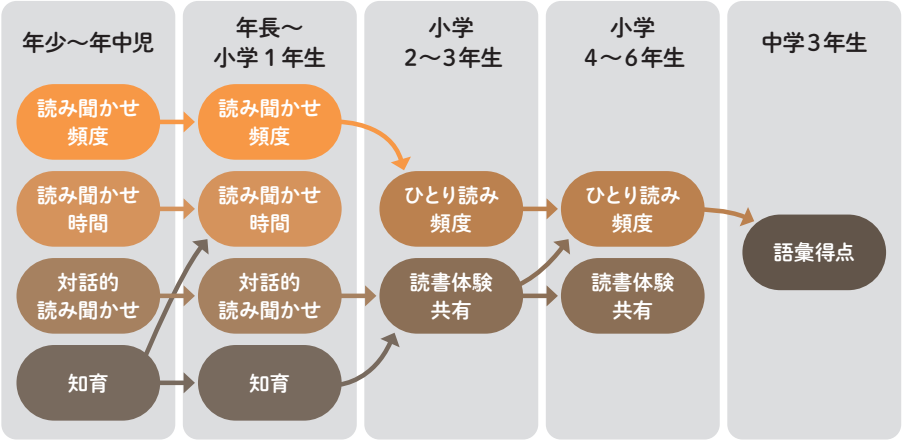
家庭での読み聞かせには、子どもが気に入った絵本を繰り返し読めるというよさがあります。園が保護者に「○○ちゃんはこの絵本が好きですよ」と伝えることで、家庭での読み聞かせが豊かになるとともに、園から家庭へと子どもの経験がつながります。個別に伝えるのが難しい場合は、その日に読み聞かせた絵本を送迎時に目に入りやすい場所に置いておくことでも、保護者と情報を共有できると思います。

反対に、家庭で読んでいる絵本を聞いてクラスで紹介すれば、それぞれの子どもの思いをみんなで共有できます。そのように、家庭と園の両方で絵本に触れる機会があることで、子どもの言葉の力や思考力はより豊かに育っていくのです。

とはいえ、現実には、絵本に親しむ時間をなかなか取れない家庭もあります。だからこそ、園での読み聞かせ体験がより重要になっていきます。

園での読み聞かせには、家庭とは異なるよさがあ

図2 読み聞かせとひとり読み・読書体験との関連について



幼児期から小学１年生までの家庭での読み聞かせや対話的なかかわりが、小学２年生以降のひとり読みや読書体験にどのように関連するか、またそれらが中学３年生の「語彙得点」にどのように影響するかについて検証した。家庭での幼児期の読み聞かせや対話的なかかわりが、小学生でのひとり読みや親子での読書体験の共有につながり、中学生での語彙力を支えていることが示唆されている。

※ベネッセ教育総合研究所「幼児期から中学３年生の家庭教育調査」より。

＊２ 調査の詳細は、下記でご検索ください。

ベネッセ　幼児期から中学３年生の家庭教育調査

ります。その１つが、子ども自身の興味・関心だけではない多様なジャンルの絵本に触れることで、絵本が表現するさまざまな世界を体感できるということです。さらに、保育者やボランティアの保護者など多くの読み手がいるので、同じ絵本からいくつもの発見ができるかもしれません。

保育者と子どもや、子ども同士に対話が生まれることも、園での読み聞かせの大きな魅力です。子どもたちは美しい言葉や面白い表現に出合うと、それをだれかに伝えたくなります。友だちや保育者など、伝えたい相手がそばにいるのは、園だからこそです。そうした日々のやり取りが積み重なって、表現力やコミュニケーション能力が育っていきます。

対話は、言葉のやり取りだけに限りません。保育者のまなざしや表情、ちょっとしたしぐさや間の取り方なども、子どもとの大切な対話の一部です。子どもたちの様子を見て、ざわざわしているときには待ってから読み始め、子どもの反応を確かめながらページをめくるといった配慮も、子どもとの対話といえるでしょう。「最後まで静かに聞く」といった約束を決めている園もあると思いますが、それ以上に大切なのは、子どもたちの様子を感じ取りながら読むことです。目安として、「子どもの表情を見るのが７割、読むのが３割」ということを意識しましょう。子どもの表情や息遣いに目を配りながら読み進めることが、より豊かな対話を生み出します。

子どもが集中しやすい環境を整えることも、対話を維持する上では欠かせません。保育者が部屋の奥に座り、子どもの視界に余計なものが入らないようにするなどの工夫が、子どもの集中力を高めます。

絵本をテーマとした園内研修で絵本から生まれた事例を共有する

保育者が園生活や行事に関連した絵本を読み聞かせることで、子どもたちは日々の体験とつながる物語に出合い、新たな世界に触れることができます。絵本の部屋やコーナーを設けている園では、子どもが落ち着いた環境の中で自分の読んでみたい絵本を探すこともできます。そうした時間は、子どもの興味や好奇心を広げる上でとても大切です。ただ、多くの保育者がそうした活動の重要性を感じる一方で、よい本のそろえ方がわからなかったり、業務に追われて「時間になったから読み聞かせを始めよう」とルーチン化してしまったりする実態もあるようです。また、絵本に関する公的な研修はほとんど行われておらず、園や保育者に任せきりになっています。

そこで、絵本に関する取り組みをより充実させるために、絵本をテーマとした園内研修を行ってみてはいかがでしょうか。保育者同士がよい絵本を紹介し合って見識を広げ、絵本をきっかけに遊びが豊かに展開した事例の共有ができれば理想的です。

ある園では、泥遊びに夢中になっている子どもたちの近くに、「土」をテーマにした絵本をさりげなく置いておきました。すると、絵本を読んだ子どもたちから「土ってずっと昔からあるんだね」といっ

た声が上がり、好奇心が広がって、顕微鏡で土を観察する活動へとつながりました。こうした事例を共有すれば、絵本の価値や活用方法が園全体に広がります。もし研修の時間を取るのが難しければ、他のクラスの先生の目に留まりやすいところに絵本を置いて互いに確認できるようにするだけでも、会話が生まれ、学びに向けての第一歩になると思います。

家庭や地域、専門家と連携し いつも絵本が近くにある環境を

予算の関係で絵本の購入が難しいケースもあります。その場合は、卒園生の保護者などに、家庭で読まれなくなった絵本を寄贈してもらうのも１つの方法です。さらに、公立図書館や小学校の図書室を訪問するといった地域との連携により、多くの本に触れる機会をつくることもできると思います。こうした工夫を重ねることで、予算や環境面での難しさも、ある程度はカバーできるのではないでしょうか。

特別な配慮を必要とする子どもが手に取りやすい絵本の提供方法に、課題を感じている園もあるかもしれません。その際には、「りんごの棚」（右上参照）という取り組みが参考になると思います。「りんごの棚」は各地の公立図書館に増えつつある取り組みなので、調べて近隣にあれば、まずは保育者が見学に行ってみるとよいでしょう。また、昨今はハンディキャップに対応したデジタル絵本も充実しているため、取り入れてみることも一案です。ただ、デジタル絵本の自動読み上げ機能などを使用する際には、子ども任せにせず、対話を通じた活用を意識していただきたいと思います。

近年は、地域に「絵本専門士」として活動する人材も増えてきました。こうした専門家と連携し、園内研修に招いたり、読み聞かせの実演をお願いしたりすれば、保育者が絵本の読み方や選び方、保育とのつなげ方などを改めて見直すよい機会になるでしょう。

絵本に親しむ経験は、子どもの可能性を広げることにつながっていきます。家庭や地域と連携しながら日常的に絵本に触れる時間を充実させ、すべての子どもが「絵本をもっと読みたい」と思えるような体験を積み重ねていくことを願っています。

「りんごの棚」とは？

読書に困難のある子どもを含む、すべての子どもたちに“読書の喜び”を届けるために、1993年に、スウェーデンの公立図書館で始まった取り組みです。棚には、点字つき絵本や布の絵本、大きな文字の本、LLブック（やさしく読める本）など、障害の有無によらず、だれもが楽しめる本が集められています。

大きな目のついた赤いりんごのロゴマークがシンボルで、最近は公立図書館や学校図書館にも設置が進み、日本では、子どもだけでなく大人にも開かれた読書の場として広がっています。

写真提供／東京都豊島区立中央図書館

保育者のみなさんへのメッセージ

子どもたちが絵本と出合っているときの、あの真剣でキラキラと輝くまなざしは、きっとどの保育者にとっても魅力的に映ることでしょう。そんな時間をすべての子どもに保障したいと思いますし、保育者のみなさんも子どもと一緒に、ゆったりとした気持ちで絵本を楽しんでいただけたらと願っています。そして、そうした絵本の世界の魅力を、ぜひ保護者の方々にも伝えていってください。